

9 ^{きょうど} 郷土をひらく

◇ ^{どりょく} 先人の努力

昔、郷土をひらくために努力した人がいます。

平岡文次郎は、会津と越後^{えちご}（今の新潟県^{にいがた}）をむすぶ交通路^{かい}の一つ、八十里越の道の改修^{しゅう}に努力し、関藤右衛門は、宮崎村より津川（今の新潟県の一部）につながる大山越^{おほやまこし}の道や新田^{しんでん}の開発に努力しました。

また、地いきの人々が協力して郷土をひらくために努力したこともあります。

会津地方から沼田（今の群馬県^{ぐんま}）につながる沼田街道^{かいてう}は、当時の人々にとって米や塩を運ぶたいせつな道だったのですが、危険^{きけん}な場所が多い道でした。とくに、西谷あたりは岩が多く、近くの村の人々で毎年修理^{しゅうり}をつづける努力をしました。今の^{いたおろし}大志や中川（宮崎、板下）には、田にできる土地はあったのですが、水が引けませんでした。田に水が流れてくるようになったのも、そこに住む人々の長い間の努力のおかげなのです。

ここでは、大志・宮崎・板下^{いたおろし}の人々が努力した^{もくれい}木冷ぜきと関藤右衛門が努力した大塩の新田^{しんでん}開発について、紹介します。

